



聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。見せしめのため、他の殉教者とともに左耳をそがれた。



聖三木図書館友の会会報『ゆるし』第3号

発行日：2011年12月3日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣

野鳥の森の思い出

ある夏、教会の青年たちと高原での合宿に行つた時の事です。数日の合宿の中で都会に住む青年たちと、「野鳥の森」という広大な施設の散策をしました。静かな森の中をゆつくりと歩いて、野鳥のさえずりに耳を傾けた思い出は、今でもみずみずしく心に残っています。その合宿まよりの青年は、その体験を次のように話してくれました。

「森に入つて行つた時、初めのうち、聴こえてきたのは自分たちのざわめきや足音ばかりでした。しかし、リーダーの勧めにしたがって、皆が別れ、ひとりになって、立ち止まって、静かに聴いていたとき、だんだん遠くの方から鳥たちが囀り始め、やがて自分たちの周りは鳥の鳴き声でいっぱいになりました。その時、



図書館「都会の中の森」

カルメル修道会司祭 中川 博道

中川 博道

私たちの日常には確かに、自分の心が思いわずらいや、ざわめきの足音で一杯になつてしまつてしまつてあります。そして、孤立感の中で行き詰まって、身動きの取れない不安を抱いたりします。しかし、そのような時、自分に届いている何らかの呼びかけに気づくことは、生きていくことの奥行きをさりげなく開いてくれることになります。

時々、生きることに行き詰つた時、「立ち止まって、ひとりになって、聴いてみる」という人生への注意深いあり方は、混乱の世界の中で私たちの心を整え、生きる道を開いていくように思います。

混沌とした時代の中で

五〇年余り前からすでに教会は、「この世界は、人類史の新しい時代が始まつており、深刻で急激な変革が次第に全世界に広まりつつある」(第二バチカン公会議「現代世界憲章」四)と告げてきました。今年十一月、七〇億の人口を数えた人類は、未曾有の体験をしながら、その真つただ中にある様相を見せています。

自分の心がうるおされて癒されるような体験をしました。と同時に、自分の最近の姿が見えたように思えました。それは自分の心の中が、自分の思いや焦り、悩みや不安と言つた「自分の足音」でいっぱいになっていくことでした。しかし、立ち止まって静かに耳を澄ませてみると、自分には遠くから呼びかけてくるものがあった。それに耳を澄ませていくとき、自分が整えられ生き返っていくことを経験しました。これからは、毎日の生活の中で時々、「立ち止まって、ひとりになつて、聴いてみる」ということを大切に生きてゆきたいと思えます。この青年はその後、ユニークな人生を力強く歩みつづけています。

私はこの事を思い出すたびに、生きることの原点のようなものを見出す思いがします。

しかし、私たちが手にする聖書世界には、人生の「混沌と闇と深淵のただなかに語りかける神」(参照：「創世記」一章一〜三)の語りかけに聴き入ることで、自分たちの人生が「光」へと変えられていった人々の出来事が記されています。

東京：上野毛教会では毎月「未就学児父母会のミサ」が捧げられる。乳幼児連れの親たちが気兼ねなくミサに与かつた後、中川神父らと談笑する。



それは現代においても、創造的に生きようとする人々が持つ共通の姿勢であるともいえます。ある二人の現代音楽の作曲家について、「隠者のような生活をする彼は、自らの生活に砂漠を作り出すことで、その砂漠に秘められた泉に耳を澄ます」。「今まで学んできたことを捨てられるだけ捨て、裸の状態になったときに響いてくる内からの声こそが、自分の音楽の源泉であると言う」と紹介されていたことがありました。

変動の激しい、あふれるばかりの情報に流されがちな時代にあつて、創造的に生きるために、私たちは、どこで、どのような態度で、「泉」である「内なる声」の促しを聴き、歩みを整えることが出来るのでしょうか。

私には都会の中の森としての、砂漠の中で「泉」を見出していく都会の隠遁所としての図書館の空間が思い浮かんできます。貴重な書物を通して、多くの先人たちの静かな語り合いを深めながら、「内なる声」に開かれ、創造的に生きるための道筋を見出していく場がここにあるように思います。

【お詫びと訂正】「ゆるし」第2号2ページの「声」欄に「中川博道神父様」とあるのは、「中川博道神父様」の間違いでした。関係者にお詫びを申し上げ、訂正させていただきます。

ルクセンブルグで再考した 「使徒継承」の言葉にできない意義



上智大学文学部教授

川村 信三

十月の半ば、西ヨーロッパの中央に位置する、秋たけなわ（といっても日本は十二月頃の気温の）ルクセンブルグに飛んだ。同僚であったジャン・クロード・オロリシ神父が当地の大司教に選任されたため、その叙階式に与るためであった。オロリシ神父は五三歳。かなり若手の大司教である。滞日二八年の知日派として知られ、現代のルクセンブルグ政財界に多くの友人を持つという理由で「進歩的な指導者」と期待されての大抜擢なのである。

ルクセンブルグときいても、多くの日本人は何の知識もちあわせていないことが多い。「小国」というイメージから「リヒテンシュタイン」や「モナコ」などと混同するむきもある。国の三方をベルギー、ドイツ、フランスの大国に取り囲まれ、事実、百年前の大公国としての独立の頃は、ほとんどの周辺領土を三國にもっていかれてしまった。言葉もルクセンブルグ語という国語（ドイツ語の方言という人もいる）はあるが、実際、国民は独仏二カ国のバイリンガルである。深い谷を挟んで三つの丘を橋で結んだ形の首都ルクセンブルグは、商業を中心とする地区、大聖堂を中心とする旧市街、そしてEUの議事堂を中心とする近代的発展を遂げる地区、そして谷底の古い歴史を持つ地区から成り立っている。オロリシ神父は、旧市街のみならず、近地区へも顔のきく大司教といった印象があった。

県の半分ぐらいの国土に、カトリック教徒が四十万いる。押しも押されもしないカトリック教国である。国民所得が世界第二位（昨年カタルに抜かれた）とあって経済的にひじょうに豊かである。世界的にみれば「小国」とかたづけられてしまいうルクセンブルグも、キリスト教の歴史からいえば、西ヨーロッパキリスト教の中心的役割を担ってきたことに、今回の渡航（実は入国は五回目）であらためて印象づけられた。

ここに始まるドイツ・キリスト教会史

首都の東部にエヒタナハ(Ettelbruck)という、ドイツ国境の古い小さな町がある。車で三十分ほどの距離である。実はこの町は教会史上甚大な役割を果たした地である。ヨーロッパの中世初期、フランク族のクローヴィスの改宗によってガリア地方からライン河付近までに正統（アタナシウス派の）キリスト教が浸透した。歴史を考えると、私たちは、ローマのキリスト教が同心円状にヨーロッパ全体に広がっていたのだと錯覚する。ところが、実際は、イタリヤ半島で盛んとなったローマ司教（教皇）を頂点とするカトリック教会（ラテン教会）が、六世紀の末、ベネディクト会修道士達の宣教によってイギリス（大ブリテン島）に渡り、その地にすでにあったケルト系の修道院系キリスト教会を凌駕した後、ケルトの影響（たとえば告解の方法や修道院文化など）を身に付け、再び大陸へと戻り、

その後初めてライン河より東側、すなわち現在のドイツ・ポーランド・オーストリア地域がカトリック教会になったのであった。

七世紀の終わり頃、ベネディクト会の修道士たちは、ライン以東に進出する際、一度、ある拠点で準備を整えてから出発した。それがエヒタナハなのである。七世紀の末、ウイブルドという司教、その後、ドイツの守護聖人となるボンニファチオなどがこの地に滞在した。その際、井戸を掘り、修道院を建て、そこに、ケルトとローマがまざりあった独特の教会文化をつくりあげたのである。つまり、この地は、西ヨーロッパキリスト教の「中心の中心」「故郷」「へそ」とでも呼べる場所だったのである。だから、当地の人々のキリスト者としての「誇り」は尋常ではない。オロリシ神父もそうした一人だったというわけである。まさに、「ヨーロッパ人」とはルクセンブルグからライン周辺に、9世紀のカロリング朝時代には生きた人々の子孫といっても過言ではないのである。同僚とはいえ、あのウイブルドやボンニファチウスの後継者として、オロリシ神父は「教会の伝統」を守る歴史的な人物となった。

とはまちがいない。
教皇こそ「伝統継承」の姿

カトリック教会には教皇を頂点とするヒエラルキーが存在する。それは、多くの近代主義者や共和国主義者たちの敵意の的となり、旧態依然としたカトリック教会のマイナス・イメージを代表してきた。バチカンの荘厳な儀式中心の共同体は常に「貧しい教会」のアンチテーゼでもあった。しかし、この教会には、イエス・キリストを源とする「使徒」の継承がまちがいに受け継がれ、今なお、「ペルソナ・ペトリ」と結びついている。実際の政治に介入することがなくなった「教皇」は、いまや、教えと道徳の面のみで「絶対的な発言権」をもっている。カトリック教会は考え、その宣言をみとめていく。それは、人間世界にあって、最善ではないかもしれないが、唯一の「伝統継承」の機関として機能している。身近な人間が、その継承の一翼を担うことになった、その事実を間近で目撃したとき、私は、言葉で尽くせない何かを感じ、この歴史の教会への畏敬の念と親愛の情を再び強くした。（イエズス会司祭）

小さな力強さに感謝

小野 博史（長野県）

先日電話でお願いした『ゆるし』50部、確かに届きました。誠に勝手な願いを聞いてくださり、本当に有り難うございました。東京から50人の援軍が来てくださった気がして、力強く思っております。

『ゆるし』は、世間一般の「図書館便り」の観念をはるかに超えていると思います。私自身、初めて『ゆるし』を手にした際、冒頭のパウロ三木の最後の説教を読み始めるや否や、涙が噴出しました。

ところで、私の所属している地域の教会は、司祭不在であり、私自身そして、もしかしたら信徒全体がなまぬくなっている…。その一方で真の救いを求めて来訪される求道者の方々や、両親の不和、離婚、貧困、いじめなどの経験し、真の愛に渴きながら心の根も多岐、今こそ、徹底して求めたい。再会が求められています。

『ゆるし』は、私の心を目覚めさせてくださると共に、写真やイラストの雰囲気や書きやすさを改めて感じました。

『ゆるし』の小さな力強さに感謝しつつ、今日から、教会で頂いた『ゆるし』を有り活用したいと思っております。誠にありがとうございました。

（編集部：小野さんは教会活動に使うため、『ゆるし』50部を求めて来られました。）

カウンターのなかから

司馬遼太郎さんの『手紙』

聖三木図書館に入館してすぐ右側の壁に、奉書紙にしたためられた手紙が額に入って飾ってある。(左下の写真)手紙の筆者は、文化勲章を受章した著名な作家、司馬遼太郎氏(一九九六年没)である。手紙の宛先は、イエズス会の河野純徳神父である。なぜ司馬氏の私信が、この図書館に掲示してあるのか。まず、手紙の全文を読んでみよう。

聖フランシスコ・ザビエル全書簡訳、御偉業を讃仰しつゝ、御贈り下さいました御厚情に感謝致します。ここ数年、こんなうれしきことはなかったように思います。私がザビエル好きであること、でありながら、その生命ともいふべき書簡を抄訳し、かもしつゝ、いらないこと、さらには、河野先生の全訳書が、内容外装とも最近の出版界ではまれなる良き書物であること、それらが一挙に胸にきて、声をあげたくなる思いでありました。

先生のお仕事にくらべると貧しいものでありますが、ビレネーのザビエルの生家を訪ねた紀行、同封して送ります。

河野純徳先生
一九八六年一月二十三日

司馬遼太郎

どうやら、河野神父が翻訳した『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(一九八五年十一月・平凡社刊)を贈ったことへの司馬氏の礼状のようである。この『全書簡』には、ザビエルが一五三五年三月、パリからスペインにいる次兄に宛てた『書簡第一』から広東沖のサンチャン(三洲島)まで、全てが収まっている。この刊行までは、『書翰抄』(一九四九年・岩波文庫刊)

しかなかったたので「ザビエル好き」の司馬氏にとつて全訳は、渴望久しかったようだ。生前の河野神父や司馬氏との関わりについて詳しい小松久晃氏(上智大外国語学部英語科卒。元大日本印刷勤務)に聞いた。

「ザビエル渡来四百年祭」の昭和二四(一九四九)年当時、司馬遼太郎さんは宗教担当の新聞記者で、四百年祭取材のためザビエル書翰抄を読んだのです。書翰抄は、後にイエズス会総長となったアルベ神父と阿部郁二氏の共訳でした。その後、司馬さんは、作家となり色々な事柄をその源流に立つて考え、執筆する手法をとつた。著名な「街道をゆく」の連載でもその方針を貫きました。そしてザビエルの生家の古城をスペイン・ナバラに訪ねた紀行文『南蛮のみち』(一九八八年・朝日新聞社刊)に、次のように書いています。

「ザビエルが残した有形のもの一つは、ぼう大な書簡である。高い格調と犀利な観察、それに柔軟な表現は、人類の重要な古典のひとつであることを失わないう。また、司馬さんは、こうも書いています。「ロヨラがいなければ、イエズス会も存在せず、ザビエルが日本に来ることがなかった。こんにち、上智大学のキャンパスの中の多くの青春も、その場所には存在していない、ということになる」と。

この源流をたどる立場の司馬さんが、飛び上がって喜ぶほど貴重な資料となる本が昭和六〇(一九八五)年刊行されました。それが、訳者の河野神父から贈られた『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』です。良書に触れた喜びと感謝を『御厚情に感謝する』と毛筆で奉書紙にしたためて河野神父に送ったのです。その手紙が、いま聖三木図書館に掲げられているわけです。

河野神父は、太平洋戦争中は日本陸軍の有する潜水艦二艇のうちの二艇の機関長を務めたという稀有な経験者だそうです。入隊のとき聖書を持っていたことから、芳しからぬ人物と見なされ、危険極まりない潜水艦勤務を命ぜられたらしい。終戦と共にイエズス会広島長東修練院に入り、そこで書翰抄の訳者のアルベ神父などの指導を受けました。河野神父がザビエルの全書簡を翻訳した背景にはザビエルが日本に初上陸したのが鹿児島であり、四百年余を経て河野神父がイエズス会士として初めて鹿児島に赴任した「縁」を感じたことによるからだといえます。

【書簡第五九】でザビエルは、ローマのイエズス会員に日本の存在を知った経緯を報告している。【書簡第七〇】はイグナチオ神父宛で、「あなたの小さな無益な子、フランシスコ」が日本布教の決意を伝えていきます。

『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』は大型の本ですが、東洋文庫版はポケットに入る寸法なので、通勤の行き帰りに読むことが出来ると思います。

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本 2011年11月

マザーテレサの秘められた炎	ラングフォード 著	女子パウロ会
人生の第四章としての死	曾野 綾子 著	徳間書店
悲しんでいい	高木 慶子 著	NHK出版
回勅 真理に根ざした愛	教皇ベネディクト十六世 著	カトリック中央協議会
図解いま聖書を学ぶ	曾野 綾子 著	ワック
ヴァチカン物語	塩野 七生 著	新潮社
復興の精神	養老 猛司ほか 著	新潮社
戦国宗教社会=思想史	川村 信三 著	知泉書館
ワインと修道院	スアード 著	八坂書房
パチカンの聖と俗	上野 景文 著	かまくら春秋社
アンドレとシモーヌ	シルヴィ・ヴェイユ 著	春秋社
大木神父奮戦記	大木章次郎 談	小学館スクウェア
なぜ「神」なのかですか	南条 俊二 著	燦葉出版社
男の子が前向きになる子育て	河合 恒男 著	PHP研究所
ハンナの戦争	ブラフ 著	ミルトス
ガリラヤのイエシュ	山浦 玄嗣 訳	イー・ピックス出版

【友の会からのお願い】

聖三木図書館友の会の新入会および会員継続更新をお願いします。皆さまから愛される図書館を目指します。

◎年会費 一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円

◎入会手続き 氏名・年齢・住所・学生証明書などの確認書類を図書館受付にご提示ください。

◎更新手続き 年会費の納入をお願いいたします。

◎年会費は、銀行口座・ゆうちょ口座からの自動払込みをご利用いただけます。

イエズス会聖三木図書館
〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1 岐部ホール内
Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/



【特別寄稿】
古くて新たなご縁
江島 正子

もう何十年前のことか。かつてそこにカマボコ校舎があった。カマボコ校舎の一つは聖三木図書館とあって、いつも背の高い外国人がいて、本を貸してくださいました。そのころは、本屋で立ち読みの連続をするなんて、考えもしなかったもので、本が読みたくなくなると、聖イグナチオ教会のお隣の聖三木図書館へ行きました。あるとき『オルレアンの乙女』の本を借りて、十歳の女の子は、あぁ、すごい、と感激しました。その当時、学校では授業で映画教室があり、『ジャンヌ・ダーク』を観ました。女の子はもう心の底から感動してしまつて、十字架に磔にされたジャンヌ・ダークが、燃え上がる炎の中で、手を高く上げて、「神さま！」と叫んだ場面は、今でもはつきりと目に焼き付いています。それから、『長崎の鐘』も観たのです。原爆投下のあと、永井博士がやつとわが家にたどりつくと、十字架のついた数珠だけが残っていて、「ロザリオ」という言葉を知りました。

聖三木図書館の本『オルレアンの乙女』、映画『ジャンヌ・ダーク』と『長崎の鐘』のロザリオで、理由は分からないが、どうして心がかかれるのでカトリック要理を勉強し、自分で霊名を「ジャンヌ・ダーク」と選んで洗礼を受けました。さらに何年か何十年かたつてドイツへ留学したとき、ケルン・アーヘンのモンテソーリ教育の人たちと一緒にいることが多く、そのときグループの一人の女性マリア・ヴァッヘンドルフさんのお兄さんが、あの聖三木図書館にいた背の高い外国人、すなわちクルムバツハ神父さまだということ分かり、わたしはみんなから大変「ひいき」してもらった思い出

があります。帰国後、今度は彼女が日本へお友達たちと来て、いろいろ一緒に遊びに行きました。妹がドイツのモンテソーリの大家だったことから、初代館長のお兄さん神父さまはモンテソーリ教育関連図書を使つてと集められていました。さて、建物を壊すからと上智会館の五



【友の会のシンボル、ネモフィラが満開に】ネモフィラが、今年も茨城県ひたな市の国営ひたな海浜公園に咲いた。花言葉を『ゆるし』と云うネモフィラの花四五〇万本が、太平洋を一望する丘三五ヘクタールを見事に埋め尽くした。

階の上智モンテソーリ教員養成コースが立ち退きを命じられたとき、同じく二階にあった聖三木図書館はしばらく閉鎖しました。上智コースはルーメル神父さまの指導によってNPOを立ち上げ、東ドイツ・スイス語圏のプロテスタント団体とエキュメニズムの形で続いている。場所は後楽園近くのプロテスタント教会の施設ですが、日本モンテソーリ協会の前之園現会長は一カ月前森司教さまから受洗したホヤホヤのカトリック信者、副会長の一人はヴァイタリ神父さま、事務局長もカトリック、編集委員長は洗礼のダイヤモンドお祝いをもう済ませた私。一方、聖三木図書館はイエズス会日本管区の布教事業として、岐部ホールが完成すると、岐部ホール二階でリオープンしました。今年初夏、『家庭の友』誌から「ロザリオ」について執筆依頼を受けたとき、初めて二階への階段を上つてびっくりしたのは、

【江島 正子氏】一九四〇年東京生まれ。上智大学外国語学部卒業。ケルン大学、ロンドン大学などへ留学。幼児教育のモンテソーリ教育が専門、教育学博士。関東学園大学教授などを経て、現在は、明和学園短期大学教授。著書には、『モンテソーリの教育法』基礎理論』など多数。

(一) 探している資料の内容を伝えると、書棚の場所を教えてくださいました。自分で探している、スタッフの方が最高の本を持ってきてくださつたこと。

(二) コピー機が設置されており、容易にコピーができる。

(三) 閉館日でも閉館時間でも、返却ポストが常設されているので重い本を持って帰る必要がない。

振り返ってみると、自分の人生と、聖三木図書館の歴史には重なり合うところがあるようで、最初は洗礼、そのあとモンテソーリ教育、最近ではサンパウロの「家庭の友」誌の資料探し。

さて、これからは何があるのかしら。

旧約・新約合本聖書

55年間の研究成果をこの一冊に

原文校訂による口語訳

聖書

フランシスコ会聖書研究所 訳注

2011年12月31日まで特別価格にて販売!

通常価格 8,400円(本体 8,000円) ●A5判上製 ●3,264頁 ●ISBN 978-4-8056-4829-2

期間限定特別価格 定価 7,000円(本体 6,667円)

サンパワロ Tel. 03-3359-0451 Fax 03-3351-9534 〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-21-9

カトリック生活

年間購読のご案内

「カトリック生活」は年間購読がお得です!

- 月刊 毎月10日発行
- B5判 44ページ オールカラー
- 定価1部210円(税込・別途送料76円)
- 年間定期購読1部3,300円(税・送料込)
- プレゼント発送、海外発送も承ります。

※海外発送は地域ごとに送料が異なります。航空便と船便がありますので、ご指定ください。

いつもよいものを
ドン・ボスコ社 〒160-0004 東京都新宿区四谷1-9-7
TEL 03-3351-7041 FAX 03-3351-5430
http://www.donboscosha.com E-mail: order@donboscosha.com